

地域づくりと『まちの'読まれ方'』について

Talking about Folklore for Regional Planning

竹林 幹雄*

by TAKEBAYASHI Mikio

The purpose of ,so called, 'Legends' Analysis is not only to analyze the structural property of the image under the stimulus of 'domestic (aural) legends', but also to understand the 'PLACENESS'. 'PLACENESS' means the significance of particular place (sometimes "the Stage"), where sometimes legends are produced and demonstrated. Then, its final goal is to get the property of the region, but for getting it, we try to analyze other domestic phenomena. From now on, the approach of that analysis is close to the approach that is used to use in the Folklore Studies, I think.

1. はじめに

風土分析がカバーする部門のひとつに民話分析がある。これは、地域を個性的に演出するためのデータとして民話を取り上げるものである。今まで畿内だけではあるが、8地域、都合10話の分析を行った。現在のところ、民話に表されている主題・話のイメージ・象徴といった事について幾つか明らかになった点がある¹⁾。以下は、今までの研究で整理された点などを挙げながら、今後の研究方針について述べる。

2. 『まち』の'読まれ方'

民話というひとつのテキストを紐解けば、そこには種々雑多な情報が見え隠れするという。風土分析における民話の捉え方としては「無意識のデータ・バンク²⁾」、あるいは「価値体系の表象³⁾」であると思われる。

特に対象としているのは、これらに含まれる「土地に関する情報」である。換言すれば、「環境(まち)がどの様に'読まれて'いるか」ということを知ることが、民話(民俗)分析の地域計画における位置であると思っている。

ここで、『まちの'読み方/読まれ方'』という用語を用いた。これは、まちを構成する様々なモノとその背後にある行動から喚起される場所/モノに対する'思い(ミクロな読まれ方)'が、それぞれ独立に存在する場所を相互に組み上げていくことで、まち全体に対する'イメージ(マクロな読まれ方)'になる(成長)という前提に立つ。但し、この'読まれ方'は全体を構成している部分要素であるが、リアにつながってはいないと思われる。個々の場所・行為によって示されるストーリーは異なり、それがまちの多様性を形成しているからである⁴⁾。

3. 民話分析の周辺

さて、過去数年に亘って民話分析を行ってきたが、そこでは一貫して、周囲の風景や自分達を囲んでいる

キーワード: まちの'読まれ方', 民話, 民俗, 場所性

* 正員 京都大学助手 工学部交通土木工学教室
(京都市左京区吉田本町)

環境についてのイメージが、極めて希薄になるという分析結果を得た¹⁾。このため、最も欲している‘読まれ方’の情報を直接に得ることが難しい。

逆に、主題や主題に関係する要素の関係がある程度明示的に示されるので、これらが‘象徴’する内容を探り出せば、間接的に‘読まれ方’の問題に対処できるのではないと思われる。その‘象徴’を読み解くためには、民話単独では読解できないので、他の民俗現象を収集し検討を加えなければならない。話を、民話・伝説だけに限っても、C.L.ストロースが述べているように、同じ地域内(あるいはその周辺部)に伝承される‘類似の話(ここでは‘神話’だが)’を収集・分析することで、‘神話素’によって構成される神話の構造が明らかにされ、(生活)様式に隠された彼ら(住民)の‘ものの考え方(民俗構造)’が分かる、としている⁵⁾。意味するところは風土分析とて同じことである。『根(root)』を同じくする現象は、何度も繰り返される性質を持つのである。

一方、まちの‘読まれ方’のうちで、情報を明示的に表しているもののひとつに『地名』がある。従来、話題にされることが少なかったが、‘まちの読まれ方’を把握する上で極めて重要な資料である⁶⁾。また、民話などと同様に、古来より伝承されてきた祭や風習などに対しても積極的に分析していく必要がある。これらには、文化人類学など他の分野での優れた研究の集積があるので、そういった視点も組み込む必要が生じてくると思われる。特に、祭儀的なものに関しては、民話の成立やその伝承などと深い関わりがある場合も往々にして存在するので、是非とも取り上げたい題材である。

また、民話の現代的/一時的なものとして‘噂/世間話’がある。これらも、住民が‘無意識のうちに’場所に意味付けを行ってきている証左⁷⁾⁸⁾なので、これらを研究材料として‘読まれ方’を分析するのも一案である。この様に、民話分析の周辺部分を洗い出しても、風土分析が対象とする疑問点に答え得る研究材料は数多くあるといえる。

4. おわりに

前節でも少し触れたが、今後の課題としては『‘読まれ方’を多面的に検討⁹⁾』する事が必要である。民話に

限らず、人が生活する場所では多くの民俗事象が互いに無関係ではいられない。同じ場所でも、‘読まれ方’の違いで意味が重層になることもしばしばである。E. Relfが言うような、『場所の意味付け/場所性』の復権¹⁰⁾によって、‘まち’という生活空間(environment)が本来持つamenityが理解されよう。

このように、ひとつひとつの事象を分析していくことで、地域に関する‘読まれ方’のデータは蓄積され、それらを紡ぎ合わせることで『地域』という多面体のいくつかの面を垣間見ることができると思われるのである。

《参考文献》

1)例えば、以下の論文

竹林幹雄・佐佐木綱・東徹;『民話を用いた地域づくりに関する研究』,土木学会第46回学術講演概要集第4部, p.504~pp.505,1991.

において、登場人物を囲む風景に関するイメージが希薄であることを指摘した。

2)M.L.フォン・フランツ;『おとぎ話の心理学』,創元社1979心理学選書,1979.

3)C.L.ストロース;『野生の思考』,みすず書房

4)ここは、以下の文献を参照しながら考察した。

C.アレクサンダー;『ハタシ・ランゲージ』,鹿島出版.

5)橋爪大三郎;『初めての構造主義』,講談社現代新書.

6)笹谷康之ほか3名;『小地名を用いた環境情報の研究』,第24回日本都市計画学会学術研究論文集,pp.463~pp.468,1989.

7)これについては、J.H.フルヴィヤンの現代‘都市伝説’に関する興味深い報告がある。

例えば、

J.H.フルヴィヤン;『くそっ!なんてこった』,新宿書房,1992.

8)‘幽霊/妖怪譚’も噂話の一つであり、また立派に民話でもある。民俗学では、柳田国男の‘妖怪研究’が有名だが、ここでは次の書物を参考にした。

宮田登;『江戸の小さな神々』,青土社,1988.

9)ここでいう‘読まれ方’は、ミクナ方である。

10)E.レフ;『場所の現象学』,筑摩書店,1991.